

～旧約聖書を読んで感じること～ (46) サムエルの母ハンナの誓い

エフライムの山地、ラマに家柄も良く、裕福なエルカナが住んでいました。ラマは「イスラエルの母」と称えられる土師デボラが、ラマとベテルの間の場所で裁きを行ったと記されていますので、当時の中心的な地方ではないかと想像します。そこに、エフライム族、ベニヤミン族が住んでいました。

エルカナには二人の妻がいました。そのひとりがハンナですが、彼女は夫に愛されているものの、子どもが生まれませんでした。もう一人の妻ペニナは息子、娘が大勢生まれましたが、夫の愛がハンナにあるので、ハンナを敵と見なして、彼女に辛く当たりました。



エルカナと二人の妻 中世写本

エルカナは毎年礼拝を捧げるため、家族全員を連れ、生贄を持って、シロに出かけました。シロに「契約の箱」が置かれていて、礼拝を行っていました。人数分の生贄と共に出発しますから、ペニナは息子、娘の分もあり、意気揚々と出かけることができました。一方、ハンナは一人分だけですから、捧げる分も少なく、惨めに思えました。子どもがいてこそ妻としての価値が認められる時代ですから、家族そろって、礼拝に行くことも辛く、悲しい行事になりました。ハンナは食事もせず、ただ泣くばかりでした。

夫エルカナはハンナに言った。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。なぜふさぎ込んでいるのか。このわたしは、あなたにとって十人の息子にもまさるではないか。」(サム上1:8)

さて、シロでのいけにえの食事が終わり、ハンナは立ち上がった。祭司エリは主の神殿の柱に近い席に着いていた。ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。そして、誓いを立てて言った。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしのために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主にやさげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」(サム上1:9-11)



ハンナの祈り Ilja Repin

彼女は心の中で祈っていましたが、唇が動いているので、祭司エリがいつまで酒に酔っているのかと問い質しました。ハンナはそれを否定し、自分は深い悩みを持った女でそれを主のみ前に注ぎだしたのだと答えました。それを知り祭司エリはハンナを祝福して帰しました。

「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」(サム上1:17)

ハンナは誓いを立てて祈りました。男子が授かるように、しかしその子を一生、主に捧げると言うのです。主に捧げるといふほどの強い信仰がハンナにあったので

でしょうか。母としては子を手放すことになりまますから辛い願いです。夫から愛を受けても、息子へ与える愛は別です。ペニナから辛く当たられ、屈辱の思いで一杯だったハンナは神にギブ・アンド・テイクを申し出ているようです。嬉しいことに、彼女の祈りが聞かれ、男児が授かりました。